



詩誌 84 - 2015.02

機影

他人の波止場で

雨

夜明け前に

射精

マザファツカ

メメ子 (三十歳)

冷静

神様の後

(無題)

そして

久谷雉

機影

小鳥たちの舌から
糸を引いてこぼれた魂が
おれの食事をスパイしてゐる

日溜まりのかけらばかり
盛られた皿の輝きを逐一
鉄棒の交差する基地へ
報告して――

抒情とはおそらく
飛行体が落とす影の分身にしか
過ぎないのだらう――

他人の波止場で

ねごと。

え？

ねごと、言つてたよ

「海に行かなきゃ」つて

そっか

で、帰らない方向の

始発がうごき

コンテナの溪谷を

かすめるわれらのコンテンツの

貧困は

たとえばむなしさの巨大マーケットや

幽霊船の

うわさばなしを呼びよせていた

ねむつてるヒトの言葉に

返事したら

発狂するつてどっちがくるうの？そんな想像を

絶する。おーきなおーきな

ヨコハマ港、大棧橋のたもと

パスポート不在の

みずと

そらと

こんくりーとは

感傷やフナムシのはびこるすきもないうえ

ホモサピエンスを散歩させる犬さえおらず

めっちゃ寒い

そもそもなんの夢みてたわけ？

つづきとかあんのこれ？
覚えてない。

だいたい夢とかみてないとおもう

ふざけんちよー波止場だべどうすんだこれ
ちよー波止場だし

みえてしまう

わたしたちの途方のかぎりは、鈍色

それでもなにも

カラフルに

じぶんじしんで夢みた夢だと

偽証しないなら

観覧車も、ランドマークタワーも

ぶつたいとしてとおく

ただ、風の

つよいところに立つ

鎖ごしに

あのなみのなまえはなみそのなみのなまえもなみ

それきりで

遠景のほかない一地带が

太陽に頬をよせ

朝はそつと、うちゆうからきていて

ごろーん

芝生みつけー

しあわせもんだな

ふふふ果たしてそうかな？

そうじゃねえだらうなクソ寒いし金もない

政府もおまえも腐敗している

ぐふ

ほんとにきいたの？

え？

ねごと。そつちの夢だか嘘なんじゃん？

あれは

みず

あれは

おひさん

これ

しばふ

記憶はどうしてゆびさせばいい

とりあえず

鼻からゆびをぬきなさい

しんじられるほかない

弱いもの

げんぎいをこしらえたもののかつてが

げんぎいの物量としてのみあるならば

考えんな

こつからまつすぐ一〇〇海里いったところに

だれもしらない

波風がさかまきつづけてる

それがぼくの記憶だ、と口にしたきみは

うっかりほんとのこと言っちゃってないか

不安になる

ふたりが

しずかな開戦の日のように

水平線をにらみつづける

かくじつに。

無意味に

それぞれの、

萎えた花のけはいのある部屋へ

くっせつした身がらをのせる電車は

すこしばかりぬくい

コンテナになり

ねむってるわたしの言葉に返事をしたか

ふいに

たずねてみたくなつたが

きみは重たいからだになつたきり

ひどい顔でねむつて

ときおり

くもり空の海洋にひびく

無人船の軋みのように

ねごとを言う

目覚めたきみには知りえない言葉を

この時刻への押し黙りかたのかたちとして

「ぼうめいとか、しなくちや」

こんどな。

返事をする

雨

重ねた嘘と引きかえに
ここに二人がいるから
雨に降られても当然だったんだ

濡れてる

桜の花びら

道

つないだ手

車の中は平気だね
ぼろぼろだけど守ってくれるね

触れてよ

桜散ってるのに

あなたの初めてを

全部もらう気で来たのに
だから

あなたは

私の一番を全部奪ってよ

守るものなんかないふりをして

すごくほしい

すごくあげたい

感情が濡れて

音楽が

くぐもつて

相変わらず雨が打ち付けて

愛してるという理由で

愛してると言うとか

ただ体温をわけあうことが

このうえなく満たされて

夜明け前に

私、この曲すつごく好きで
すべてが愛おしくなる瞬間があるんだけど
で、今、抱きしめてるんだけど
何をもって、遠くにいるあなたのこととか

同じように風景を見ることができたら
同じように音を聞くことが

同じように笑ったり傷ついたり
ただ同じように感じる事ができたら

高層マンションの

41階

冷たいフローリングの床

裸足

昨日の空気をパジャマにはらませて

ぬるい指でなぞる

音のない

窓の向こう側の景色

霞んだ地平線

うすい空

湾岸

まばらな航空灯

敷き詰められたように立ち並ぶビル

静かな運河

ベルトコンベアみたいな高速道路

車が等間隔で運ばれていく

始発の電車が眠そうに出ていく

昨日のままの工事現場

建てかけのビル
人のいない歩道
赤のままの信号機

切り離されたように浮かぶ私の居場所

約束なんていら
ない
契約もいら
ない
義務も責任も
いら
ない
いら
ない
そんな優
しさ
私
が
あ
な
た
を
あ
な
た
が
私
を
欲
し
が
る
ぶ
ん
だ
け
一
緒
に
生
き
て

心に触れるように体に触れて
体に触れるように心に触れて
だからこんなに気持ちいいね
ずっと忘れてたこと
思い出したよ

街が少しづつ浮かび上がって

あなたの寝顔を想像しては
安らかであってほしいと思う
夜明け前

射精

私の頬に出した
あたたかい精液
じつと見つめたあとで
申し訳なきようにふいてくれた
子供になったような
くすぐったい気持ち

本で読んだんだけど
男って

射精した瞬間愛情の一部も
流れていくらしいね

だから
あなたの横顔は哀しそうなのか

流れた愛情は
また巡ってくるんだろうね
潮の満ち引きみたいに
繰り返し

あなたの腕のなか
満ち足りて
うれしいです、と言ったら
ごめん、と言われそうで

その
男のひとの横顔は
手の届かないところ

三木悠莉

マザファツカ

おとなだから中身を知りたいね
おんあなたは子供をうんでばかり

土のうえに横になつたつて

へブンリープレイス、軽く傾いだ。

シュプレヒコールをまだ知らなくて

通り過ぎた

まてんろう

誰かがうたつてる。

海ができる。

最近はずんずん存在しなくて

コンタクト乾いて目薬さすおんなは36歳

客観がふさがれる

もはやうらやましいがよくわからない

ぼくとこのときみが船に乗っていて遭難して

一人しか救命ボートに乗れないとしたらと笑う

接吻ばかりこぼした白い歯のちちおやに

私が乗ると言ったら

どんなかおするか知りたい

自由が罪ぶつて

少しびんかんの自意識過剰に腰をおろす。

吸って吸って、

吐かない。

煙草買い忘れてもういちどくつをはく
そのてのひらにだけ

ほんとうの事が詰まってるって信じて
全然かまわないんだ。

テレビみてる

いいCMと思ったら聖教新聞のだった。
してやられた。

街を歩け獣のいきづかい

自由は（原文ママ）

そこにあるって言って、全然、全然かまわない。

いりぐち

でぐち

わからなくってなきたい

泣き出したのは4ヶ月のむすこ

ザーメンみたいなおいがする

「ぼくはうつぶせたいです」

声にださないで

くちびるのかたちだけ

「ぼくはうつぶせたいです」

いちど離れた手を

もういちどつなく暴力

ゆるしている

世界にはもうひとりにはがいて

基本的にそれは愛とかそういうのでぐるっと

まとめて問題ない範疇でいて

ぼくをゆるせ

遺留品のこせない

いのちをきれいにとばして

いきている

すっかり、はんしょくをして
折りたたむフェイスタオル2枚揃えてリュックにつめる
ふりかえるつむじは3年も生きていて
不思議ばかりとらえては足首を忘れる。

吸って吸って

吐かないか

吐けないか

おたんじょうびおめでとうの凶器で

きれいに暴かれる幸福をやわらかく踏んでいく

中身が知りたくていつだつて困ってる

「あのこははおや!!」

かわいいいのち、ぎらぎら、んん

飯田華子

メメ子（三十歳）

メメ子のヴァギナの中で、客のペニスは吃つていた。股がっつてぐいぐい締めつけてもほんのり硬くなるだけで、一向に射精する気配はない。

これだから夜番はいやだと思ふ。酒の入った客たちは気持ちばかりが先走り、体は酔いで鈍っている。飲んだ勢いで来たものの、メメ子自慢の三段絡めにも芳しい反応を示さない。

勃ちの悪さに気づいた男たちは焦り、なんとか目的を達成しようとメメ子の体をいじくり回したり、あれこれ注文をつけたりする。それは気の毒でもあり、また腹立たしくもあつた。

できねえなら来るんじゃないよ、自分のちんこのことぐらい自分で分かれよ。そんな言葉を飲み込んで、この上なく優しい声でメメ子は言う。

「……口で、しましようか？」

チラツと時計を見たらもう十分も騎乗位を続けていた。これだけでもイカないなら方法を変えよう。比較のおとなしい客だから、時間内に抜けなくても文句は言わないだろうが、言葉少なに服を着て出口まで送り出す時間は、やはり気まずいものがある。

「いや、いいよ。今日は無理そうだ」

客は曖昧に笑つてメメ子の髪を撫でた。腋の下からアルコール混じりの汗が匂つた。

もしかしてこの人、ムムの店で飲んで来てたりしてね。ふふ、とメメ子はかすかに笑う。

ムムは中学の同級生でキャバクラ嬢だ。ひと月前、橋の屋台で偶然再会した。

川の流れるこの街は、北側の岸が飲み屋街、南側が風俗街になっている。ソープ嬢メメ子と対岸のキャバクラ嬢ムムは、この二つの街をつなぐ橋の屋台で、たまたま隣席になつた。

それは深夜にだけ出るラーメン屋で、「男性お断り」という貼り紙があるわけでもないのに、なぜかいつも客は女ばかりだ。店主は色黒の中年女性で、無口な彼女を含め、店の中は常に女性しかいなかった。たまによそから来た男性客が知らずに入ると、女たちはカウンターから一斉にジロツと強い視線を飛ばす。その女性専用車両のようなムードは、さんざん男相手に働いたあとのホステスや風俗嬢によつて守られ、メメ子もまたかねてよりここを愛用していた。

男が嫌いなわけではない、排斥したいわけでもない、ただ、今この仕事上がりのひとときだけは、異性の目を気にせずゆつくり飲みみたいだけ。

その日夜番を終えてきたメメ子は、いつものようにザーサイとビールを注文した。と、急に横から二の腕を掴まれた。

「もしかして、メメ子ちゃん!？」

肩の薄い金髪の女が目を見開いていた。どこかで見た顔のような気もするが、アイラインと付けまつ毛で縁取られた目は、小さいくせにカラーコンタクトを入れたせいでほとんど白目が見えなくなっており、思いつきの照合を拒むかのようだ。

「あたし! ムムだよ! うわー、何年ぶり!？」

狭い屋台の隣席は息がかかるほど近い。無邪気に大声で話す女の口から、エビせんべいの匂いがした。

「……ああ、ムムちゃん」

変わったね、と言つてあげなきやいけないような気がした。ムムの化粧や髪型はその言葉を望んでいるように見えた。

ムムは中学時代バイキン扱ひされており、あだ名は「茶色」だった。いつも粉を吹いている浅黒い肌、ガリガリの小さな体、勉強もスポーツも常にビリで、特に面白いことを言うわけでもなく、体操着や文房具は薄汚れていた。

それなのに遠足の班分けでは積極的に人気者グループに入ろうとして拒まれたり、バスケ部のスターだった男子生徒に告白して振られたりしていた。自分にまったく引け目を感じていないようだった。

時々トイレに閉じ込められたり、教室の窓から石を投げられたりしていたが、「もうっ！ やめてよっ」などとかわい子ぶって拳を振り上げるムムは、「皆がアタシに構って欲しくてイタズラするの、人気者で困っちゃう☆」といったまんざらでもない様子で、傍で見ているメメ子はぞっとしたものである。

成績上位グループに所属し、クラスの中ではひたすら地味に慎ましく暮らしていたメメ子は、ムムをいじめもしないが庇いもしなかった。むしろどちらかといえば、エスカレートしていくムムへのいじめを、ある種の快感を持って見守っていた気がする。

思春期を迎え、美貌や運動能力の差が如実になり、自分のポジションに戦々恐々とするクラスメイトの中で、ムムはあまりに屈託がなさすぎた。それはもう罪悪だった。皆はムムの外見よりも、その鈍感さを憎んでいじめていたように思う。

そんなムムが十五年経った今、浅黒いまだがきちんと化粧された顔に笑顔を浮かべ、ポリューミーにセットした髪で隣にいる。ガリガリだった体は、腰は細いままに胸だけが成長し、襟ぐりの開いたニットからは谷間が覗いていた。上目遣いでメメ子を見つめる真つ黒な目が、「どう、きれいになったでしょ？」とばかりにバチバチと瞬く。

「……変わらないね」

しかしメメ子はこう言ってビールを飲んだ。ムムのどこか薄汚れた感じは相変わらずだった。

「えー！ そうおー？」

不服そうにムムは両手を頬を覆う。手首に時計が光った。夜店で買ったような安物だ。若い女の子がわざと冗談めかして付ける分には可愛いが、三十にもなった厚化粧の女には若干不気味ですらある。

そうそう、こんな時計を平然と付けちゃう残念さ、そして自分の残念さに気づかない鈍感さ。

ああ、変わってない、ムムだ。「茶色」だ。

「メメ子ちゃんも変わってないよ。なんか、あのまま大人になった感じ。やつぱちんとしてアタマ良さそう」

ムムはメメ子のビールを自分のグラスに注いだ。

「最初、あれ？ どうしてこんなところに普通のOLさんが？ って思ったもん。よく見たらメメ子ちゃんて超びっくりした」

メメ子はパーバリーの白いコートを着ていた。大学の頃に母親が買ってくれたものだ。下は黒いセーターにグレーのボックスブリーツである。ソープで働くようになってから、メメ子はことさら保守的な服装を心がけていた。

「この近くで働いてるの？」

ムムに質問され、

「うん。アマゾネス」

メメ子は店の名を告げた。

「えー!! ソープじゃん！ うちのお客さんも行ってるよ！ うそ！ まじで？」

酒灼けた耳障りな声でムムはわめいた。

「なんでなんで？ メメ子ちゃん大学行っただでしょ？ なんで？」

「今どき大卒の風俗嬢なんてゴロゴロいるよ」

「えー、でもあたしソープは無理。キャバクラまでが限界」

「へえ」

メメ子はタバコに火をつけた。

「ムムちゃんは、セックスが大事なんだね」

煙を吐き出しながら言う。

「なんで？」

「大事なことは仕事にできないじゃん。私はお酒を飲むのが好きだから、キャバクラは無理だなあ」

「そう？ 酒好きならキャバ業しいんじゃない？ ただで飲めるし、同伴でいいとこ連れてってもらえるし」

「せっかくだと行くなら、客なんかと飲みたくないよ。それなら客とやって、やつたお金で一人で飲みに行きたい」

「ワケわかんねー！」

ムムは手を叩いて笑った。棚に障る、やたらオーバーリアクションだった。

大口開けて笑ってんじやねえよ、茶色のくせに。メメ子はタバコの吸い口を軽くはじいた。先端から火の粉がこぼれ、それはカウンスターの所で組まれたムムの太ももを直撃した。

「ぎゃー！ あつっ！」

「ごめん！ 大丈夫だ！」

ニーハイとミニスカートの絶対領域にぼつんと赤い点ができていた。

ああ、なんだったってこの女はこんな格好をしているんだろう。

「ごめんね、不注意だった、跡にならないかな」

ビール瓶を押し当てて冷やしながら、メメ子は謝り続けた。

「いーよいよ、全然平気だってこんなの」

なんでムムってこうなんだろう、とメメ子は思った。そしてなんで私はこうなんだろう。

「本当にごめんね」

結局、屋台の勘定はメメ子が持った。

「まじで気にしないで。奢ってもらえてラッキーだし」

また飲みたいからと連絡先を尋ねてくるムムを、メメ子は拒むことができなかった。

タイマーが鳴る。終了時間の五分前だ。

「ごめんね、イケなかった」

メメ子は客から体を離れた。お腹に力を入れて引つ込めながら手早く下着をつける。

二十代後半から付き始めた腹回りの脂肪はしぶとく、ダイエットをしてもなかなか落ちない。いや、その前に、メメ子は昔ほど熱心にダイエットができなくなっていた。やせたからといって何が変わるのだろうという気分が先立ってしまう。

学生時代から弾き語りを始めたメメ子は、今も月に五本はライブをしていた。呼ばれるのは高円寺や下北沢の小さなライブハウスで、ギヤラはほとんどない。

一昨年、自費で四枚目のアルバムを出した。ラップに挑戦したもの、パーカッションや金管楽器を交えたものなど、多彩な十曲入りのCDである。

プロのミュージシャンと何度もスタジオで録音し、腕のいいエンジニアにマスタリングを頼み、知り合いのツテを辿って人気漫画家にジャケットを描き下ろしてもらった。とにかくたくさんの人の手を入れたので、完成までには二年近くかかり、出費もかなりのものになった。

発売記念のパーティーはキャバ五百人のライブハウスを借り、インディーズシーンでは名の知れたミュージシャンをゲストに呼んだ。おかげで客の入りは上々だったが、それでも赤字は出た。

あらゆる資金はすべてメメ子のヴァギナで稼いだ。辛くはなかった。これできつと何かが変わるはずだという確信があった。自分の本来いるべき場所に行けるような気がした。

そうして今、メメ子は郊外の歓楽街で、見知らぬ男と着替えている。

職業に貴賤はないと思いたい。やりがいでいだってなくはない。大つばらには言えない仕事だが、客の嗜好を瞬時に察して性的サービスのできる自分は聡明だと思う。うまく満足させたときは、いいライブをしたときのような達成感がある。

だけど、射精に失敗した男の前で、腹をへこませて媚び笑いをし、「私だけイッチャやって恥ずかしい」などと心にもない世辞を言う夜は、これから先いいことなど何もないような気がした。

アルバムを出して以降、新曲はできないままである。歌も作れなくなった自分は、ここを居場所と定めるしかないのだろうか。そう考えると、どうにかなってしまうそうだった。

「おつかれ☆☆今日わ何してる？ 了フ勺↓ないから飲みたいな♡」

店を出るとムムからラインがきていた。再会してからのこのひと月、何度か誘われたものの断っていたが、今夜は飲んででもいいかもしれない。

「了解、じゃあ屋台で」

風が冷たかった。側溝からは湯気が立っている。さきほどまでメメ子が浸かっていたお湯だろうか。道にへばりついてたゲロが温まって匂い出していた。カシミアのマフラーで鼻を塞ぐ。

「アマゾンズ」の錆びた看板は、ウイंकする女の子のイラストが描かれている。八十年代のアニメのような古くさい絵柄だ。風営法で新規出店が規制されているため、軒を連ねる建物は皆老朽化している。欲望の搾りカスのような川沿いを、メメ子は橋まで歩いていった。

屋台につくと、すでにムムはカウンターで梅割りを飲んでいた。

「メメ子ちゃんのメールつてシンプルだよな」

「そう？」

「うん。怒ってるのかと思った」

へえ、ムムでも人の気持ちを考えることがあるのか、と、メメ子は意外だった。いや、もしかしたらずっと前から何もかも分かっていたのかもしれない。分かった上で敢えてあのような行動をとっていたのかもしれない。だとすればそれはなぜだろう。どのような形であれ人と関わりたかったのか。そのくらい寂しかったのか。

そういうえばムムはどんなふうに着たのだろう。

「え？ 親？ いないよ」

ムムはあつけらかんと言った。

「そうだったんだ。ごめん、知らなかった」

「いのいの。たまにお客さんからも『寂しいでしょう』とか言われんだけど、特になんとも思わないだよな」

「そうなんだ」

「てかあたし『寂しい』つてよく分かんないんだよな。なに？ 『寂しい』つて」

「ええ？……うーん、友達が遠くに行つちやうときとか、好きな人ともう二度と会えなくなるときとか、そういうときの気持ちかなあ」

「へえ。やつばメメ子ちゃんてアタマいいんだねえ！」

バカにされたような気がした。

「ねえ、なんで大学行つたのにソープ嬢になつたの？」

これは無邪気さを装った皮肉だろうか。

「なんでつて？」

「大学出てたらもつといい仕事いっぱいあつたでしょ」

「やりたいことがあつたから」

「やりたいことつてソープ？」

「違う、それはお金のため」

メメ子は卒業後中堅の商社に入った。しばらくは勤めながら土日にライブをしていたが、やがてここは自分のいるべき場所ではないように思えて辞めた。

ムムと机を並べていた中学のときから、メメ子は自分が他と違うと感じていた。

映画や音楽を好む人間は周りにいなかったたので、週末には「びあ」を片手に一人で一時間かけて都心に出かけ、渋谷のユーロスベースや新宿ロフトを訪れた。クラスメイトと趣味の話ができないのは少し寂しかったけれど、同時に優越感もあった。

あんなたちにはきつと分からないだろう、知りもしないだろう、GLAYやKinokoなんて聞いているくたらない連中には、何も理解できないだろう。

地味に、とにかく自立たぬように学校生活を送りながら、メメ子はいつも、周りに「合わせてあげている」という意識だった。特に勉強をせずとも成績はよかった。

高校は県立の進学校に行き、さあここならきつと私にふさわしい友達ができるはずと期待したのも束の間、カルチャーに関心の高い生徒はほとんどいなかった。わずかにいても、メメ子ほどの知識も熱量もなかった。それはメメ子を落胆させたが、やはり同時に自慢げな気持ちにもさせた。誰も私のセンスにはついてこれないんだわ、と、クイックジャンプを読みふけり、ゆらゆら帝国のライブに行き、文芸坐のゴダール特集に通った。

セックスを試みてみて、ライブハウスで出会った大学生を自分から誘い、高校二年で処女を捨てた。

さすがに中学とは違い、成績はみるみる落ちていったが、三年の夏から予備校に通って、口に出してもみっともくはない程度の私大に合格できた。

大学のサークルで、やっと趣味の合う仲間に出会ったときは、飛び上がるように嬉しかった。そして自分の知っている映画も音楽も、ほんの一部に過ぎなかったことを教えられた。

阿佐ヶ谷のライブハウス、三宿のクラブ、街ではいつも何かが同時多発で起きていて、観客に留まっているのがひどくつまらなく思えた。

ギターを練習し、中学の時からこっそり書き溜めていた歌を初めて人前で歌った。歌い終えたあとは気絶するほど恥ずかしかったが、メメ子と同じ趣味を持ち、メメ子以上に博識な友人たちが「天才かもしれない」と絶賛した。

学祭の夜、ステージに立つメメ子の一挙手一投足に盛り上がる観衆を見て、ああようやく自分自分のために用意された場所に来たのだと感じた。ライブを見ていた写真部の男子から交際を申し込まれ、初めて彼氏ができた。

卒業後も音楽は続けたが、社会人になってからの生活は学生時代と雲泥の差だった。毎日決まった時間にスーツを着て満員電車で揺られ、とにかく仕事の常識を叩き込まれるばかりでメメ子のハイセンスな獨創性はまったく尊重されず、同僚は海外旅行と洋服のことが頭になさそうな女子社員に、口数の多いことが明るいことだと信じ込んでいる男子社員だった。

大学に入ってようやく自由な場所を見つけたと思ったのに、せつかく大人になったのに、またあの「合わせてあげている」気持ちを味わうことになるとは思わなかった。

飲み会で酔った上司の連発する冗談に、さして面白くもないので笑わないでいると、

「カタいな〜」

と肩を叩かれ、

「今まで彼氏はいたことあるの？もしかしてまだ……？」

とニヤニヤしながら尋ねられた。

「セクハラですよ」

不愉快さを押し込めて注意したら、「柔軟性のない四角四面の真面目人間」といった烙印を押された。

その後、この上司は日中のオフィスでも、

「真面目にコツコツやってくれるけどもうちょっと柔軟性が欲しいな、女性ならでは。あ、これもセクハラになっちゃうか。でも僕は女性に期待してるんだよ。これからの時代、女性の力が絶対必要になってくると思う」

と言いつつ、四角四面なのはどちらでしようか？と返したいのをメメ子はグツとこらえた。「女性の力が必要だ」などというとなつてつたようなたげ方で誰が納得するだろうか。

どうしてこの上司は私をただの「新卒の女の子」としてしか見ないのだろうか。どうしてそこらへんにいるような女と同じ態度を私に求めるのだろうか。ニコニコと話を聞くことや、柔らかな物言いや、媚びた笑いを要求するのだろうか。こんなに才能のある私に。

メメ子は、上司の期待に添うような女子社員を演じることで何かが踏みにじられていくのを感じた。自分の気持ちを押し殺して、平凡な「女」の鎊型にはまることは、売春じみた行為に思えた。

それならいっそ本物の売春のほうがいいと清潔な気がした。もともとから性風俗の世界に興味があった。ベタベタした中年に触られるのは少し抵抗があったが、「男女平等」を謳うオフィスで仕事外の「女らしさ」を演

じるよりも、仕事として「女」を演じセックスをするほうが、まだ割り切れる気がした。

それに一生風俗嬢をするわけでもない、音楽活動に力を入れて人気が出ればいいのだ。確かに音楽で食べていけるのはほんの一握りだろうが、私ならきつとできるはずだ。風俗嬢という「衝撃的な」体験は、創作活動の肥やしにもなるだろう。

そうだ、もう私は中学生じゃない。行きたい場所へ自分で行ける大人なのだ。会社を辞めよう、ライブをしよう、体を売ってお金を稼ごう。

「どうしても風俗をやるなら別れる」と学生時代からの彼氏は言った。それでひとまずスナックでバイトを始めたが、指名客たちが言外に匂わせるセックスへの期待は強い圧力だった。

話をするだけで何倍もの値段の酒を出す店にわざわざ来るのは、性的な期待があるからに決まっている。とても見てみぬフリをしてあしらうようなことはできなかった。そんなことができるのは「いい女」だけだが、メメ子にヤ二下がる客たちは不格好な中年ばかりであり、こんな男たちを相手にいい女ぶっても、うだつの上がらない女がさらにうだつの上がらない男を弄んで憂さを晴らしているだけのようなおぞましい図が浮かんだ。これに気がかない女だけが水商売をやるのだろう。

考えれば考えるほど、思慮深く潔癖な自分はソープランドで働くしかないような気がした。

彼氏は去ってゆき、メメ子には実家を出て一人暮らしを始めた。

初めて店に出た日はさすがに躊躇う気持ちもあつたが、「これは芝居なんだ、ソープ嬢の役なんだ」と思つたら簡単にセックスできた。まったく傷つかなかつた。貶められなかつた。会社員の役もホステスの役もできなかったメメ子だが、わざとらしく音を立てて陰茎をしゃぶるのも、作り声で喘ぐのも恥ずかしくなかつた。

きつと含羞のある私は、逆にここまで身を落とさなければ恥を捨てられないんだわ、とメメ子は思った。そしてそんな悲哀はシンガーソングライターの自分にピッタリだと思つた。

メメ子はソープランドで働きながら歌を作り続けた。

時々恋人もいたが、皆ライブや友人づてに知り合つた男性たちであり、いつもどうしても自分の職業を言うことができず、別れを繰り返して今に至る。

しかしこの話をムムにする気力はなかつたし、したところで理解してもらえない自信もなかつた。「なんで大学に行つたのにソープ嬢になつたの？」という質問には、何か申し訳ないような気持ちがこみ上げてる。

「でもキャバクラも大変だよね」

メメ子は話題を変えた。

「どんなつまらない話にもケラケラ笑わなきゃいけないし、お客さんの『やりたい』光線をうまくかわさなきゃいけないし」

「そうでもないよ。つーかあたしがずっと喋つてるし。あはは。だから『色気ないなー』つて言われちゃうんだよね、Dカップなのに」

「そうなんだ」

「そうー。食べても全然お腹につかないで胸にはつかいかくの」

「……ムムちゃん、お店の女の子に友達いる？」

「ううん。あたしあんま女と友達になれないの」

「そうだろうね」

「ムムみたいなタイプは嫉妬されちゃうんだろうな」つてお客さんに言われた

今夜もムムの谷間には健在だった。安物のネックレスのメッキでかぶれたのだろうか、浅黒い肌にアツアツと湿疹が出ているが、まるでそれを見せびらかすように深いVネックを着ている。

こんな汚いおっぱいに鼻の下を伸ばす冴えないオヤジと、そんなオヤジにおべっかを遣われていい気になつてる三十女。

やはり、ムムは徹底的に鈍感だからキャバクラ嬢をやつていられるのだろう、とメメ子は思った。さきほど少しでも殊勝な気持ちになつた自分が悔やしい。

私がこうなったのは仕方がないのだ、と半ば逆上気味に頷く。私はあまりに繊細だからこそソープ嬢に身をやつすしかなかったわけだが、ムムは凶暴ともいえる浅はかさで、水商売より風俗を一段下に見ている。「キヤクラまでが限界」という無神経なセリフは忘れない。

ああ、教えてやらなくてはいけない。お前は勘違い女だということを。お前は不快な存在だということを。薄汚い「茶色」だということ。

「じゃあムムちゃんは男の子にモテるんだね」

たぶん都合のいいように扱われているだけだろうにね、と思いつながらメメ子は水を向けた。

「どんなところに遊びに行くの？」

どうせたいしたところには連れて行かれてないだろう。誰も羨ましくないようなデートを、さも自慢げに言い募るはずだ。さあどんなふうにお前の価値を知らしめようか。

「うーんと、土手とか、屋上とか」

「は？」

「星が見えてアがるんだ」

「……」

「メメ子は絶句した。

「今の季節は冬の大三角形が見えるよ。オリオン座のベテルギウス、こいぬ座のプロキオン、」

「え、なんか、ムムちゃん詳しいね」

あんなに成金の悪かつたムムが「冬の大三角形」と言つたことにメメ子は驚いた。

「うん、星はね。あと、おおいぬ座のシリウス」

「——シリウス！」

ふいに誰かが叫んだ。店主の声だった。

驚いてカウンターの正面に目を向けると、彼女の瞳はどこか夢見るように潤んでいた。

「え、シリウス、好きなんですか？」

無口な中年女の店主の変貌に、メメ子は思わず間抜けな質問をした。

「まあ太陽みたいなもんだからね」

今度はカウンターの端から声が飛ぶ。何度かここで顔を合わせた常連客だ。

「太陽？」

「シリウスは、夜の地球から見える最も明るい恒星」

教科書を読むような口調で店主が言つた。

恒星ってなんだっけ？ メメ子は頭がぼんやりしてきた。酒が回ってきたのかもしれない。

それにしても何かが妙だ。「シリウス」と言つた途端、店の空気が変わった。

「ココキリコ」

ムムが呟く。

「え？『ココキリコ』？」

あはははは。何人かの女がどつと笑つた。なんだろう、どうしたのだろう。

あははははは。笑い声が広がる。

「なによ『ココキリコ』って」

メメ子もだんだん可笑しくなつてきた。あははははは。みんなが笑う。あははははははは。

おかしな夜だった。

結局ムムに嫌味のひとつも言えず、すつかり酔っぱらつてしまった。なんであんなに笑つていたのか思い出せない。

酒が残っているのか、少し頭が重かつた。今日は昼番である。いつそ休んでもよかつたが、生理も近く、月末はライブが続く予定だ。今のうちに今月分を稼いでおきたかつた。

この仕事を始めてずいぶん経つが、メメ子は貯金が一切なかつた。一日出れば少なくとも五万円は貰えるので、なくなつたらまた働けばいい、という利根的な金の使い方がすつかり身についていた。

どうせ今日は平日だ、さほど忙しくはないだろう。出勤して三十分経つが、まだ客は来なかった。

メメ子はマットに寝転んでスマートフォンをいじくり始めた。Wikipediaで「恒星」を調べる。

「恒星（こうせい）は、自ら光を発し、その質量がもたらす重力による収縮に反する圧力を内部に持ち支える、ガスの天体の総称である。人類が住む地球から一番近い恒星は、太陽系唯一の恒星である太陽である」

そこまで読んだとき、部屋の内線が鳴った。

「ご指名で九十分です」

股間をシャワーで軽く流し、バスタブにお湯をため、コンドームに潤滑ゼリーを仕込む。

「いらっしやいませ」

やってきたのは昨夜ついに射精しなかったあの客だった。

「あら、リベンジに来てくれたんですか？」

「今日はギンギンだからね、ほら」

手を股間に導かれ、ズボンの上からその硬さを確かめた。

「わ、すごい」

さあ仕事だ。腹をへこませて風呂呂に入り、客の性器を洗っていく。泡立てた石けんの中で包皮を剥くと、ぶんと生臭い匂いがした。

「今日はお休みなんですカー？」

話しかけつつ、こつそりと石けんを消毒薬入りに変える。

「そう、ムラムラしちゃってますね」

では無神経な男である。昨夜は飲んだ帰りだから仕方ないと思ったが、休みの日にわざわざここに来たら、なぜ出かける前にしっかりと洗っておかないのだろう。こうした男はたいてい、痛いだけの前戯を得意気にしてくれるか、完全なマグロになってこちらの体力を消耗させるかのどちらかである。とにかくさっさと射精させてしまおう。

丹念に洗い終えたあと、湯に浸かって「潜望鏡」と呼ばれるフェラチオをした。下品に音を立てて上目遣いで吸い上げる。先端から薄しよっぱい汁がぬるぬると滴った。いい兆候だ。

風呂呂から上がってマットを敷き、ローションを塗るたくつつ絡み合った。客がぐいっと乳首をつまむ。

「痛」

生理前の皮膚は敏感で、メメ子は思わず小さく叫んだ。

「あ、ごめん」

客は手を引つ込め、同時にペニスもしぼんでいった。まったく、こんなところばかりデリケートなんだから。舌打ちしたいような気分だ。メメ子はブレイを続ける。足の指、アナル、蟻の戸渡りから睾丸へと、ゆつくりじらしつつムードたつぷりに舐め回した。が、先ほどまでの勢いはなかなか蘇らない。長期戦になりそうだった。

「ちよつと休憩しましょうか」

ローションを落として体を拭き、ベッドに腰掛けてお茶を飲んだ。

「おねえさんさあ、本当はいくつなの？」

メメ子の店のプロフィールは二十二歳になつていて。

「二十二、ってことはないよなあ、もつといつてるでしょ」

「うふふ、じゃあいくつに見える？」

「うーん、二十七と見た」

「えっ！ なんて分かったの？」

「三十歳のメメ子は目を見開いて驚いたフリをした。

「俺、けっこう人間見てきたからさ。職業柄」

「なんのお仕事してるの？」

「スーパ―」

「スーパ―マーケット？」

「そう、ずつとバイトだったんだけど、この前契約社員になったんだ」

「えー、すーいー！」

メメ子は大げさに手を叩いてみせた。どうせお追従かどうかを疑うような男ではないだろう。もしそんな神経があればきちんと下半身を洗ってくるはずだ。演技にリアリティは必要ないと思った。

「そんなにすーいーと思ってるやないだろ」

しかし予想に反し客は絡んできた。

「え、すーいーと思ってるよ。まじで」

「ねえ、俺、いくつに見える？」

メメ子は客をまじまじと見た。磁気ネックレスに若ぶつた茶髪。昔は細身だったのだろうが、せり出し気味の腹は中年のものだ。四十前後だろうと思つたが、

「三十……二十くらい？」

うんと若めに見積もつてやつた。

「三十五」

「そうなんだ！ 見えない！」

もつと上かと思いました。そんな言葉を読み込む。

「三十五で契約社員なんて全然すくくないだろ」

「でも私にはできないよ。一つのところで長く働けるのはやっぱりすーいーと思う」

それは本心だった。

会社を辞めてしまったことを、メメ子はこの頃ときどき悔やむようになっていた。「繊細だから」「音楽活動をしたいから」と理由をつけて、私はただ楽な方へと流れていっただけなのではないか。もちろんソープの仕事は「楽」と言い切れるようなものではないが、世間の常識に採まれることなくいたずらに年を重ねてきた感もある。学生時代の友人に会うと、価値率もプラストも銀座の店も知らない自分にひどく引け目を感じた。もつと若いうちに経験しておくべき苦労や我慢があつたのではないかと思ってしまう。

いや、そんなことはない、私だって二十代をそれなりに頑張つたはずだ、とメメ子は気を取り直す。曲もたくさん作つたしライブだって続けてきた。創作の苦しみも、人前に立つ覚悟も、したことはない者には分からないだろう。店では客に組み敷かれて喘ぎ、家に帰れば曲を作つて歌い、しかしそれはまったく金にはならず、私なんてセックス以外の価値もないんだとみじめさに泣き、それでもその暗闇に耳を澄ませてメロディを探し、再び歌詞を書いた。この二年ほど新曲は作れずにいるが、少し疲れてしまったのも無理はない。あの日々がもつと報われてもいいはずだ。

いや、しかし、とここでまたメメ子は逡巡する。報われるためのアプローチを自分はしただろうか。「いつか誰かが私を見出してキラキラした場所に連れて行ってくれるはず」という幻想に囚われ、ただ待ち続けていただけなのではないか。「いい曲さえ作つていればどうにかなるはず、どうにもならないなら私の才能がそこまでだつたつてこと」などとうそぶいていたが、ただただ恥をかきたくなかつただけなのではないか。

時々イベントで楽屋を共にする地下アイドルたちが、恥も外聞もかなくなり捨てて営業をしているのを見て、「頑張ってるね」などとせせら笑っていた自分は、いったい何をしてきたのか。四枚もアルバムを出しても状況は何ら変わらなかつたが、変えるための努力などしなかつたではないか。——考えれば考えるほど、後悔と焦燥で胸が焼き切れそうだった。

「でもおねえさんもこんな仕事続けてらんないよね」

メメ子の気持ちを見透かしたように客が言う。

「二十七ならそろそろ考えたほうがいいんじゃない？」

「そっだね」

本当は三十だけだね。

「おっぱいの位置も下がってきてき」

客はメメ子の乳房を揉み始めた。

「きゅ……、あんっ」

すぐにメメ子は感じ始める。「感じ始める」という演技をする。が、それは最初は演技でも、没頭すれば本物になった。好きでもない男に触られるのはプライドを蹂躪されることだが、ソープ嬢の役を演じる限りは

受け容れなければならぬ。それならばいい、それならばいい、それならばいいのだ。こちらがその気になったほうが客の反応もずつとよくなった。

「やっぱり柔らかいなく、若い子と違って、いやらしい」

客はゆつくりと揉みしだく。

——強くするなよ、強くするなよ。

そう念じながらメメ子は喘いだ。

「もう我慢できない」

客が荒い息を吐く。

「私も」

メメ子もため息をつく。上手に色っぽくつけたと思った。

と、次の瞬間、メメ子の腕は後ろにねじ曲げられていた。

「いたたたたた！」

叫んでもがいてもやめてくれない。客はメメ子の両腕を掴んだまま後ろからペニスを挿入してきた。

「えっ！ ちょっとー！ うちの店、生は禁止ですよ！」

慌ててメメ子は叫んだ。

そのとき、壁一面に張られた鏡の中の自分と目が合った。腹の出た中年男に犯されて恐怖に顔を歪めていた。垂れはじめた胸と脂肪のついた下半身が、突き上げられるたびにぶるんぶるんと揺れる。

今思いきり叫べばボーイが助けにくるだろう。そして、客に犯されて気の毒な、もう若くはない風俗嬢の裸体を見るだろう。このままいいようにやられるのと、それはどちらが惨めだろうか。

「うっ！」

客がかすめた声を上げ、腕の力が緩んだ。メメ子は素早く身を離れた。後ろではヴァギナを失ったペニスが勢いよく精液を噴出させていた。

「お前さあ、」

後背位の膝立ちのまま、ペニスから精液をポタポタ垂らして客が言った。

「あんまり人をバカにするのもいい加減にしるよ」

川は沈みかけた陽を受けてキラキラと輝いていた。

自販機で暖かいほうじ茶を買い、店で貰ったアフタービルを飲む。避妊に失敗した場合、七十二時間以内に二度この薬を服用すれば、妊娠はほぼ防げるそうだ。生理前だからあまり心配はないが、念のため飲んでおくに越したことはない。

「今が四時か。あと十二時間後にもう一回、忘れないで飲まなくちゃ」

昼番は午後六時までだが、今日はもう仕事にならないと思ひ早退した。

メメ子は川上に向かって歩いて行く。上流には小高い丘があり、そこには遺跡の天文台がある。奈良時代のものだと推定され、この街唯一の指定文化財だが、関心を示す者はいなかった。そのため管理もずさんである。もう少し暖かくなれば、遺跡周りの公園にカップルの姿も見かけるが、今の季節はほとんど人がいない。時々メメ子はこの丘でギターを弾いた。眼下に広がる歓楽街に向かって大声で歌うのは気持ちよかった。

「そろそろ潮時かもね」

あのおとすく、メメ子は服を着て内線をかけ、「九番です」とボーイに告げた。「九番」は禁止事項を破った客を指す隠語である。

そうした客は店の出口で取り押さえられ、「出禁」の文字とともに顔写真を貼り出されることになっている。さらに身分証明書と百万円の罰金が課されるが、このうち何割かはメメ子に対する感謝料として支払われるらしかった。

「あーあ」

天文台、と言われてもよく分からない岩のかたまりが散らばる丘で、メメ子は大きく伸びをした。空には星がちらほらと輝き始め、西側はトキ色に染まっていた。

「色とりどりの鳥たちが手取り足取りアシンメトリー」

「どうしてココから地球に来たんですか？」

店主はちらりとメメ子を見て、手元で何かを計算しながら話し始めた。

「私たちは単性で、自分たちだけでは花が咲かせられないのね。それで昔つから他の星に種を貰いに行つて繁殖してきたの。地球に行くのは『ココキリコ』で、火星に行くのは『ココメヒコ』まあ、『じゃばゆきさん』みたいな感じかしら。私らが自分で自分をそう呼ぶのは、軽い自虐なのよ」

なるほど、とメメ子は頷き、

「だけど、そんな話を私なんかにしていいんですか？」

と刺激しないように尋ねた。話を疑っているのではなく、純粋な疑問だと思わせるように腐心しながら。

「そんなの、商売してる女ならたいい知ってるわ。だって昔つからだもん。どの街にだつてココキリコはいるのよ。あんたみたいに最近の子は知らないかもしれないけど。なんか、あんまそういうこと言つちやいけない空気になつてるから」

私たちの存在は放送禁止用語みたいなものよ、と店主は乾いた笑いと言ふ。

「ココキリコはみんな話し好きだから、だいたい水商売をするわね。風俗をやる子もいるけど、ソープはまず無理でしょう。体の構造が向いてないのよ」

「体の構造？」

「そんなにたくさんできないの。土だから、あんまり一気に摩擦すると崩れてきちやうのよ、中から」

「中から」という言葉が生々しかった。メメ子は地球人だが、たくさん客を取った日は、確かに「中から」崩れてくような感覚になる。

「あの、それで、『種』を買つたらどうするんですか？」

店主はいい加減面倒くさそうな調子でため息をついた。

「無事に体に植え付けたらココに戻るわ。春のあいだにね。それで土に還るの。そしたらまた夏に花が咲くから」

「へえー」

メメ子は感心した。思いつきで言っているのではなく、昔から彼女の脳内にはこの神話が構築されていたのだろう。

だんだん、本当に、シリウスを太陽とする「惑星ココ」があるような気がしてきた。

「だけど、ココキリコの中にはたまに植え付けができない者もいるわ、私みたいにね。私は人と話すのもあんまり得意じゃなかったし。もう三回も春を逃したから帰れないわね。そういうココキリコはずっと地球に住んで、他のココキリコ相手の商売をしたり、夜にはこうして星を眺めたりするのよ」

店主の視線の先で、シリウスが輝いていた。

もしかしたら今は、この女性にとつて、故郷（だと思つている星）を眺める仕事前の貴重な時間だったのかもしれない、とメメ子は察した。それでそそくさと丘を下りた。

ふと、星空がロートになって体に注ぎ込んでくるイメージが浮かんだ。

その夜、メメ子は久々に曲を作つた。夢中でギターを弾き続け、気づくと明け方になつてた。慌てて二回目のピルを服用し、眠りについた。

それからしばらくメメ子は店に出ず、従つて川沿いの街にも行かなかつた。アフタービルで生理が早まつてしまい、その後はライブが続いたためである。

新曲はなかなか評判がよかつた。とはいえ、客が出演者しかいないようなライブばかりだったので、皆は共演者として氣を遣つてくれただけかもしれない。

しかしメメ子は嬉しかった。曲を作ること、それを人前で歌うことも楽しかった。報われるかどうか以前に、好きだから音楽をしているのだと思ひ出した。

「とはいつても、それだけでは続けられないよね」

今日、メメ子は半月ぶりに店へと向かつている。月に一度の性病検査があるのだ。

今日メモ子の財布には五千円しかなかった。客の慰謝料はまだ振り込まれない。店を休まなければならぬので、これを遣い切つたらしばらくは苦しい日々が続くだろう。

三十も過ぎて、しかも長年ソープ嬢をしているというのに、こんなしみつたれた財布の自分が恥ずかしかった。しかしムムに奢ってもらつては、より惨めになりそうだった。

メモ子の気も知らず、ムムはスイスイと飲んで行く。

「メモ子ちゃん、全然飲んでないじゃん。お酒強いのか知ってるぞ☆」

「てか、妊娠してるのにそんな飲んで平気なの？」

「だつてあたしは土だもん。関係ないよ」

ムムはまたグラスを開けた。このままいくと割り勘では足りなくなる。会計は別々にしてもらえらるだろう

かとメモ子は氣を揉んだ。

「大丈夫、ほんとお金のことには気にしないで」

「でも私奢られるの好きじゃないし」

「いいじゃん今日くらい。あたし有り金全部使うつもりだもん。ココには持つていけないし」

「いくら持つてるの？」

「五万」

有り金全部というにはシケた金額だ。もつとも、五千円しかないメモ子には何も言えないが。

「なんかさー、三十過ぎて学生みたいだね」

メモ子は笑った。そうだ、私はずつと学生気分を引きずっている。

「えー、あたし学生るとき飲んだりしなかったよ」

「学生」つて、『大学生』つて意味ね」

「ああそうなんだ。じゃあたし中学生しかなかった」

「あたしもよ」

カウンターの端で常連の女が言った。

「この街の女はだいたいみんなそんなもんじゃない」

「いいなー、大学。ちよつと憧れるかも。勉強はしたくないけど」

ムムはビールから焼酎に切り替えていた。

「まあ、楽しかったよ。行つてよかったとは思ふ。行かなくてもよかったかもしれないけど」

「メモ子は当たり前障りのないコメントを返す。

「でもあたしも中学行つてよかったよ。メモ子ちゃんと友達になれて」

「え、友達だつたつつけ？」

半ば冗談、半ば本気でメモ子は言った。

「すぐそういうこと言うんだから。メモ子ちゃんはおあたしのこといじめなかつたじゃん」

「あ、やつぱ『いじめられてる』つて思つてたんだ？」

メモ子は驚いた。

「そりやそうだよ。あれだけされたらさ」

「でも、なんでいつも笑つてたの？」

「わかんなくなつたんだもん。他のやり方が、今は泣いたり怒つたりできるけどさ。地球でこれだけ過ごしたから」

「なんであんな人気のある男の子に告つたりしたの？」

「そういうことしちゃいけないって知らなかつたから」

「今は知ってるの？」

「知ってるさ。『あたしなんか』つて思わなきゃいけないんですよ。いつも。『そんなことないよ』つて誰かが言ってくれるまで」

「じゃあ今は『あたしなんか』つて思つてるの？」

「思うわけないじゃん。土なんだから」

店の女たちがどつと笑った。

「まあ大変よね、地球のお嬢さん方はさ。あたしたちは花になっちゃえば終わるもの」
先ほどの常連客が言う。

「花になれる人もいるけど」

別の客が言い、

「なによ、まだこつちであと二年あるじゃない」

常連は拳を振り上げる真似をした。

「どうやら『ココ』のワンシーメンは、地球の長さで三年らしい。十二年かかって一回りするの、と、メメ子は少し酔った頭で計算した。

「ね、ね、メメ子ちゃん、飲んで飲んで。あたしの地球最後の夜だから」

「あー、うん、そうねえ……」

「もおー。じゃあさ、あのウケる歌、歌つてよ。その歌にお金払うよ」

「なに、ギヤラクれんの？」

メメ子は皮肉めいた笑いを頬に浮かべた。やっぱりこの女は鈍感だ。宇宙人だかなんだか知らないが、平気で人を傷つける。そしてこんな奴に傷つけられた自分に、メメ子はさらに傷つく。

「なんだっけ？ 鳥がどうしたっていうやつ。歌つて歌つて」

メメ子はカウンターに五千円を置いた。

「ごめん、お金ないし、私はこれで帰るね。気にしないで楽しんでつてよ、地球最後の夜」

もうこいつらの宇宙人妄想などどうでもいい。メメ子は川沿いを早足で歩いて行った。空に月がくつきりと浮かんでいた。

「メメ子ちゃん、ごめんー!!」

後ろからムムが走って追いかけてくる。メメ子も走り出した。

「ちよつと、やだ、待つてよー!!」

二人は距離を一定にしたまま、歓楽街の岸を走り抜けて行った。

丘に着いたときは、メメ子もムムも足がもつれ、荒い息を吐いていた。

「ちよつと……、もう……、メメ子ちゃん……、走つて逃げないでよ……」

「しつこいよ……あんた……」

「ごめんつて。そんなつもりじゃなかったの」

「そんなつもりじゃなかった、つて？」

メメ子は振り向いた。斜面の少し下で、ムムはぜいぜい言いながらこちらを見上げている。

「そんなつもりじゃなかったのはいつだって誰だってそうだよ！ みんなそんなつもりじゃなかったけどどうなっちゃうてるんだよ！ 私だってこんなつもりじゃなかったよ！」

「メメ子ちゃん……」

「こんなつもりじゃなかった！ 私は中学で一番頭がよかつたもん！ 高校では一番センスがよかつたもん！ 大学では天才つて言われたもん！ こんなはずじゃなかった！ 音楽が本業で、でも『STUDIO VOICE』にちよつとエッセイとかも書いて、『僕らの音楽』で町田康と対談したり、園子温の映画音楽やったり、そんな本編にもちよい役で出たり、最終的には『プロフェッショナル』で今までの下積み時代を語ったり、なんかそういうふうになるはずだった!!……なのに、なんでこんなショボい街で性病になって、あんたみたいな女に奢られて歌わなきゃいけないの？ なんてこんな、あんたみたいな、茶色に……」

ひくんと喉が痙攣した。目からポタッと涙が落ちた。

「こんなはずじゃなかった……。ほんとやだ……夕サすぎる……」

一度緩んだらもうだめだった。メメ子は声を上げて号泣した。ムムはどこかぼんやりした顔でそれを眺めていた。

「取り残さないで虜にしてよ、バストサイズは八十八、未広がりにございます……」

いきなり流れ出した自分のラップでメメ子は泣き止んだ。ムムがスマートフォンでYouTubeを見ていた。

「これかー！ メメ子ちゃん本名でやってるんだね。やつぱこの曲まじウケる」

「……」

メメ子はその場にへたり込んだ。
「あたしこの曲地球で一番好き」

能天気なリズムが静かな丘に響いていた。

「ちょっと、それ止めてよ」

涙をすすってメメ子は言った。

「え、ごめん、またあたし間違えた？」

「いいから」

ムムの手からスマートフォンをひたたくて停止ボタンを押した。

「私、新曲作ったの。聞いて」

そしてメメ子は歌い始めた。

それは素朴なフォークソングだった。複雑なコード進行は一切なく、とにかくシンプルに、自分の気持ちを伝えることだけ考えて作った歌だった。

辛かったことも嬉しかったことも、恥ずかしがらずに歌おうと思った。たとえ誰にも理解さなくても、伝えようとしてみよう。

半月前に感じた、星空が注ぎ込んでくるイメージを思い浮かべる。それはメメ子の中で濾過され、輝く声になっっていく。

夢を見たこと、愛したこと、憎んだこと、恨んだこと、目眩するほどの怒りも、もがいてももがいても岸に届かないような絶望も、いてもたってもいられなくて片っ端から友達に電話をかけた夜も、泣きながら酒を飲んでゲロを吐いた朝も、メメ子の歌で、星になればいい。

さあ、サビだ。メメ子は大きく息を吸う。ゆっくりりと、落ち着いて、隅々まで声を響き渡らせるように。

丘の下の歓楽街は、今夜もネオンが瞬いている。

ムムと同伴したタカちゃんは、退店祝いにボトルでも入れただろうか。

話し好きのコキリコは安いドレスで店に立ち、のぼせあがったオヤジが汚い精液をぶちまける。それは遙かシリウス系の惑星で、三年後の夏に花となる。

ああそうだったらしい。本当にそうだったらしい。

醜くても、くだらなくても、どうしようなく欲深くても、それでも世界はきつと美しい。

丘の上から、街を抱きしめるようにメメ子は歌った。メメ子の声は丘にこだまし、幾重にも重なり、最後の残響が消えると、あとには張りつめたような静寂ができた。

「……どう？」

ややあつて、メメ子はムムに尋ねた。

「うーん。ラップのほうが面白かった」

「……あ、そう……」

メメ子は再びへたり込んだ。その隣にムムが座り、二人はしばらく無言で空を眺めた。

「あーあ、残念だな、せっかく好きな曲見つけたのに帰んなきゃいけないなんて」

ムムは伸びをした。

「CD渡すよ。向こうで聞ける？」

メメ子はタバコに火をつける。

「ううん、もう向こう着いたら土になるから。そしたら何も分からなくなっちゃうんだ」

「そうなんだ」

「メメ子ちゃんのこと忘れちゃうし」

「そうなんだ」

「前にさ、メメ子ちゃん、『寂しいって友達が遠くに行っちゃうとき』って言ってたじゃん？ 今さあ、寂しい？」

「別に。あんた友達じゃないもん」

「そうか」

「あんたは寂しい？」

「よくわかんない」

「そう」

「あ、星が並んだ」

「え？ 星？」

聞き返そうとムムの方を向いた瞬間、ポンツとシャンパンの栓を抜くような音がした。

驚いたメメ子が一瞬目をつぶり、そして再び開けると、ムムの姿はなかった。

「あれ？ ムム？」

冬の終わりの空に、おおくま座のシリウスが輝いていた。

今夜もメメ子は橋の屋台でザイサイとビールを注文する。店主は相変わらず何も喋らない。

「アマゾネス」の風俗講習員になったメメ子は、新人ソープ嬢に接客指導をしている。

「具体的な目標を設定しないとすぐに三十ですよ」と今日は二十三歳の女の子に言った。あまり賢くないような彼女は、とりあえず領いたもののピンとこない顔であった。二十三歳の自分もこれと似たようなものだったのだろう。

講習員の傍ら、メメ子はネットラジオの一番組の音楽担当もしている。「音楽全般なんでもやります」という名刺を持って業界の知り合いに売り込み、知り合いの知り合いから紹介して貰った。

「トシ食っちゃってますがイチから勉強させてください」

とプロデューサーに頭を下げ、コーナー紹介のジングルや季節に合わせたBGMを依頼された。

今のところこの仕事は、ただ言われたとおりのものを作るだけで、自分のオリジナリティなど皆無である。何度もやり直しをさせられ、一番つまらない形に直された挙げ句、三十歳まで何してきたの？と言われることもしばしばだ。

どうせ死ぬなら好きなことだけをしようと思ひ、そして好きでもないことをして、死にもしなかつた三十年だった。

わずかなギャラが振り込まれたとき、メメ子は一人で祝杯を上げた。

まだあと何十年かは生きなくてはならない。

明日はライブだ。

バストサイズは八十八、末広がりにごさいます、と、メメ子はかつて地球一好きだと言われた歌を口ずさみ、ぐいつとビールを流し込む。

冷静

冷静でさえあれば
すべてはすみやかに動く
誰も損をしないし
心がざわめくことはない

冷静でさえあれば
あたたかい料理を食べることができ
もし君が冷静であるならば
そして僕も冷静でいられたら

あー、なんて激しい雨
ミサイル発射音のような笑い声
顔は少しも笑っていないのに
この部屋は回りつづけている

それは地球を従えた月のよう
冷えすぎて味のしないコーラくらい
それは美味しくてみんな泣いている
舌を焼くほど冷たくて

クリスマスツリーに本物の雪
どれほど寒くても叫んではいけない
彼女はワーカー・ホリックを信じている
冷静に事をこなしさえすれば

雨のように降っていきける
雪のように降っていきける
夜空から空よりもっと高い夜空へと
凍てつき舞う雪のように降っていきけるだろう

神様の後

きみどり色のカマキリが

鎌を振り

水滴を半球にする

見ていると

半球はすぐに球になり

ひしゃげた姿はすぐに水の容かたちへと

整えられるのでした

*

神様のいない町には

政府も病気もなく

私は人の妻と結婚しても良いし

仕事中にビールを飲んでも良い

神様がなくなつて一年ほどして

あなたもようやく気が晴れたのだろうか

様子をうかがつてみても

いつもと変わらず自転車で出かけていくので分からない

あなたを見送つた後で

一人になって引き戸を開けると草のにおいのする庭

見ているも捕らえきれない緑色のぼやけた範囲の中に

黄色い花が散らかつている部分があり

そこで今朝、カマキリを見たのだつた

*

あなたは何をしても良いから

欲望を充たすために会議する会社員のように

欲望を充たすために子守する母親のように

何もしないで寝ていても良い

傷つけるだけ人を傷つけて

その報いを受けなくても良いし

猫に餌をあげてはいけないうだなんて誰も言わない

好きなだけやると良い

私は自分のよろこびのため以外には

何も禁止することがない

信号の青と赤の違いは凶鑑の魚の種類のようにだし

スズメという名の鳥が、いまから枝から飛ぶのだと

喉をふるわせ言うこともできる

(魚は水を自分の肉に代え、翼にし、水中を羽ばたいていった)

そして雑多な庭に靴下のまま降りて

その茎をさえ折れる

それをどことなく捨てる

しめった土の切れ端がするどく鳥の心臓を刺し

そのスズメという鳥が、いま枝から飛び立ち

この時に、怨霊のような神様がふと戻ってきて

私だけならば全然かまわないのに

それより先にきつとあなたが仕事から戻ってきて

私が沸かした風呂に入り

汗を落とすあいだにも

まだ帰らないものの名を

すべての人の記憶から根絶やしてしまうまで、あなたはきつと神様を許さないだろう

収容車がまた街角に停まっている。

煤けたひとたちが長蛇の列を成して国籍検査を待っている。

他国の人間のふりをしている私たちはその横をすり抜ける。あのひとたちが行く先を知っています。収容所、焼鍋、ナイフ、もう人間として扱われず名前も失う。でも、口にはしません。

近頃では買物が満足に出来なくて、アイスクリームなんて買えません。それでも生活は十分です。冬空のしたシユラの並木通り沿いに駆け抜けて、黒い検閲官たちを見ていないふりをしてアパートへ帰る。小さい頃はヨシユアが遊んでくれた玄関ホールも、今は閑散としています。

エレヴェータを降りたらさつと右角の廊下を確認して、それから左の方の自分の家へ。ドアを三度かたがた鳴らします。三度に分けてひとが部屋に入っていたと見せかける。鍵をしっかりと掛けて、早く奥の部屋に入らなくてはならない。そのとき女の子たちの声が聞こえた。

「いないじゃないのよアンナ」

「絶対いるわよ。さつきあの子にラビの散歩をさせてたところだもん。いま部屋に入ったわよ」

搜索だ。搜索だ。見つかってしまう。捕らえられてしまう。あの子は私の正体を知っているのだ。あの車椅子の女の子の犬の世話をする、五ドル貰えることになっていた。でも彼女は私の居場所を密告すること、五ドルよりもずっと大金を手に入れようとしているらしい。

バスルームで耐える。鼓動が跳ね上がる。荒くなる息までも抑えて恐怖に凍りつく。

また声がる。荒い男の声だ。

「ここに隠れているだろう」

「ここはマルタが仕事用に借りているだけですよ」

「女の子がいる筈だ。呼んだのに答えずに逃げたんだ」

「先生の助手の子では？ 彼女は外国語が解らないんです」

「いや、日本人だった。見たんだ」

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

「もう大丈夫よ。ごめんね、私たちがここに入るのを見て勘ぐられてしまったのよ」

マネージャの女性が部屋に入ってきた。私たちを匿ってくれているのだ。

私は組んだ親指を十字架の形にして強く握った。

そして

裸一貫から叩き上げる
何もかも拾う
屑も塵もすべて
役立たずを拾う
灰までも素手で集める
火傷をしながら
何も捨てるものなんて無いのだ
存在しているのだから
叩き上げろ一生

——赦さないで欲しいんだ。

*

概念上の山荘で
あの日が無数に繰り返されます
彼らは死にました 我々で殺しました
自己批判と肅清
私は死刑囚となつて
概念上の牢に入り
手紙を多く書いて過ごし
脳溢血の果てに死にました

地球に立つている
私たちはまるく回っています
楽しいって思わないと死んでしまうよ
最後の燐寸に火を点ける
綺麗だ　そして暖かい

最後の火は煮炊きのためでなく
煙草の為に使おうね



1
9
8
4

参加詩人

機影

久谷雉

他人の波止場で

小林レント

雨 夜明け前に 射精

ちんすこうりな

マザファッカ

三木悠莉

メメ子 (三十歳)

飯田華子

冷静 神様の後

小倉拓也

(無題) そして

泉由良

詩誌84 - 2015.02 冬号 (最終号)

web

<http://poets1984.tumblr.com/>

twitter @poets_1984

https://twitter.com/poets_1984

編集 泉由良: hakuchusha07@gmail.com

「84」は、1984年4月～1985年3月に生まれた詩人が2014年に制作する同人詩誌です。